ティーチング・ポートフォリオ（教育業績ファイル）

教員氏名	森　篤史

主な担当科目	DAW応用,DAW基礎,NOTATION SOFT応用,NOTATION SOFT基礎,イヤートレーニング,コードプログレッション（アドバンス）,コードプログレッション（ベーシック）,コンポジション＆アレンジ①,サウンドクリエイト①,サウンドクリエイト②,ソルフェージュ（中級）Ⅴ,ソルフェージュ（中級）Ⅵ,トラックメイキング①,トラックメイキング②,ポピュラー音楽理論①,ポピュラー音楽理論②,ポピュラー作曲・編曲法①,ポピュラー作曲・編曲法②,メディア創作応用Ⅱ,メディア創作基礎Ⅱ,聴音・視唱ソルフェージュ②

2025年の教育目標・授業に臨む姿勢	デジタルツールを活用して授業の質を高め、ペーパーレス化を継続する。オンライン教材を点検・更新し、授業外でも学修が進む環境を整える。2025年は学外講演や高校模擬授業が多かったため、そこで得た示唆を授業に還元し、初学者にも伝わる説明と段階的課題設定を徹底する。学生の理解度を把握しながら改善を重ね、教育の質の向上を目指す。
2025年の教育に関する自己評価	2025年は、授業改善を意識した教育実践を継続的に行うことができた。デジタル教材の整備とペーパーレス化により授業運営の効率化が進み、学生の学修機会を拡張できた点は成果である。特に、学外講演や高校模擬授業で得た「伝わりやすさ」や段階的な説明の重要性を学内授業に反映できたことは大きな収穫であった。一方、学生の理解度把握や個別対応には改善の余地があり、今後は評価方法やフィードバックの在り方を見直していきたい。

2025年のFD活動に関する自己評価	2025年は、全学FD、部会FD、分科会FD、大学院FDなど多様な研修に継続的に参加し、教育改善や組織運営に関する知見を得ることができた。特にソルフェージュ分科会やジャズ・ポピュラー音楽部会におけるFDでは、カリキュラムや指導方法について具体的な議論に触れ、自身の授業設計を見直す契機となった。これらの学びを授業運営や学生対応に反映させることで、教育の質向上に一定の貢献ができたと考えている。
授業改善のために取り入れた研修内容	ソルフェージュ分科会や基礎ゼミ分科会、ジャズ・ポピュラー音楽部会のFD研修を通じて、学修到達目標の明確化や段階的な課題設定の重要性を再確認した。特に初学者への説明方法や、理解度に差がある学生への対応についての知見を授業に取り入れ、課題提示の順序や説明の言語化を工夫した。また、全学FDや大学院FDで扱われた教育の質保証や評価に関する内容を踏まえ、学生の理解度を意識した授業運営を行っている。

2025 年度（秋学期）「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：1662　教員名：森　篤史

1）アンケート結果に対する所見

今学期担当した全 15 科目の集計結果を通覧すると、シラバス理解度・授業運営の透明性・受講意欲・わかりやすさに関する設問（Q1～Q3、Q5、Q6）は、ほぼ全科目で学短全体平均を上回るか同水準にあり、「トラックメイキング①②」「卒業ライブ」「ポピュラー音楽理論②」等では最高評価（4.00）が続出した。総合満足度（Q10）も大半の科目で 3.5～4.0 の高水準を維持している。一方、複数教員が共同担当する「クリエイティブスタディーズ」では、わかりやすさ（2.92）・興味関心（3.00）・総合満足度（3.00）が他科目に比べ相対的に低く、自由記述でも「授業外でのグループ活動の負担が大きい」との指摘があった。また、授業時間外の学修時間（Q7、1 コマあたりの予習・復習・課題等に充てた時間の平均）は科目により差が大きく、「聴音・視唱ソルフェージュ②」（32 分）「NOTATION SOFT 基礎」（25 分）「イヤートレーニング」（23 分）等の実技・演習系科目で学短全体平均（63 分）を大きく下回った。同科目の自由記述では、テスト中の私語について指導を求める声もあった。

2）要望への対応・改善方策

「クリエイティブスタディーズ」については、担当教員の一人として、授業内にグループでの理解・共有時間を確保し、授業外連携への依存を減らす方向での見直しを、共同担当教員に提案していきたい。学修時間の少ない実技・演習系科目では、次回授業までの課題（音源分析・採譜・自宅練習記録の提出等）を明確に提示し、授業内でも予習復習の具体的な進め方を示すことで、自律的な学修時間の確保を促す。「聴音・視唱ソルフェージュ②」の私語については、次学期より座席配置と注意喚起のタイミングを見直し、集中できる受講環境の整備に努める。

3）今後の課題

複数教員担当科目では、集計結果が科目単位で返却されるため、個々の教員の指導内容と評価の対応関係が見えにくい。共同担当科目については担当教員間で結果を共有し、振り返りを行う仕組みを整えたい。また、実技・演習系科目における授業外学修時間の底上げは継続的な課題であり、次学期は課題提示方法の標準化と、学修時間の自己管理を促す取り組みの導入を検討する。

以　上